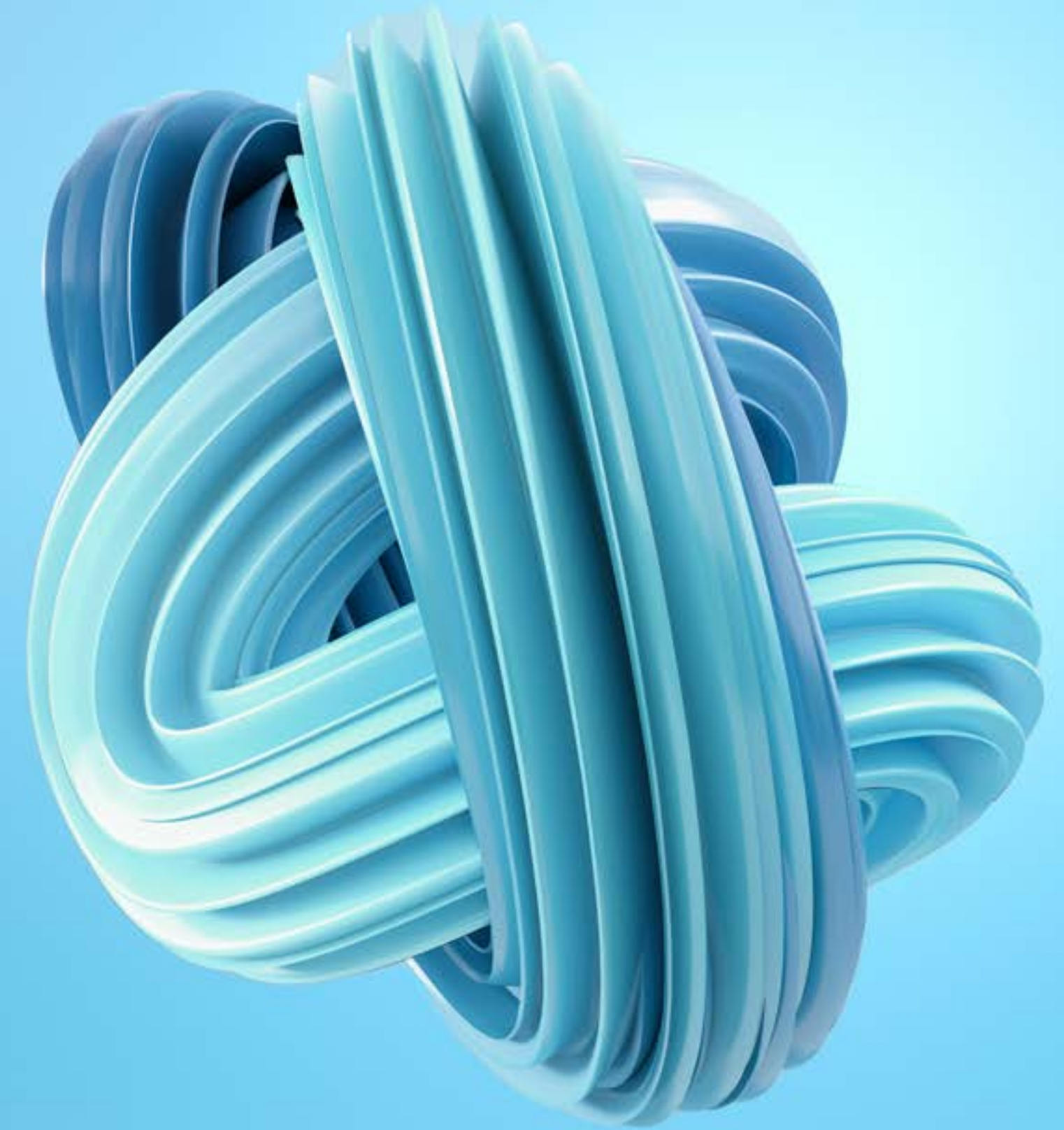


Eブック

# ネットアップが描く クラウドの未来

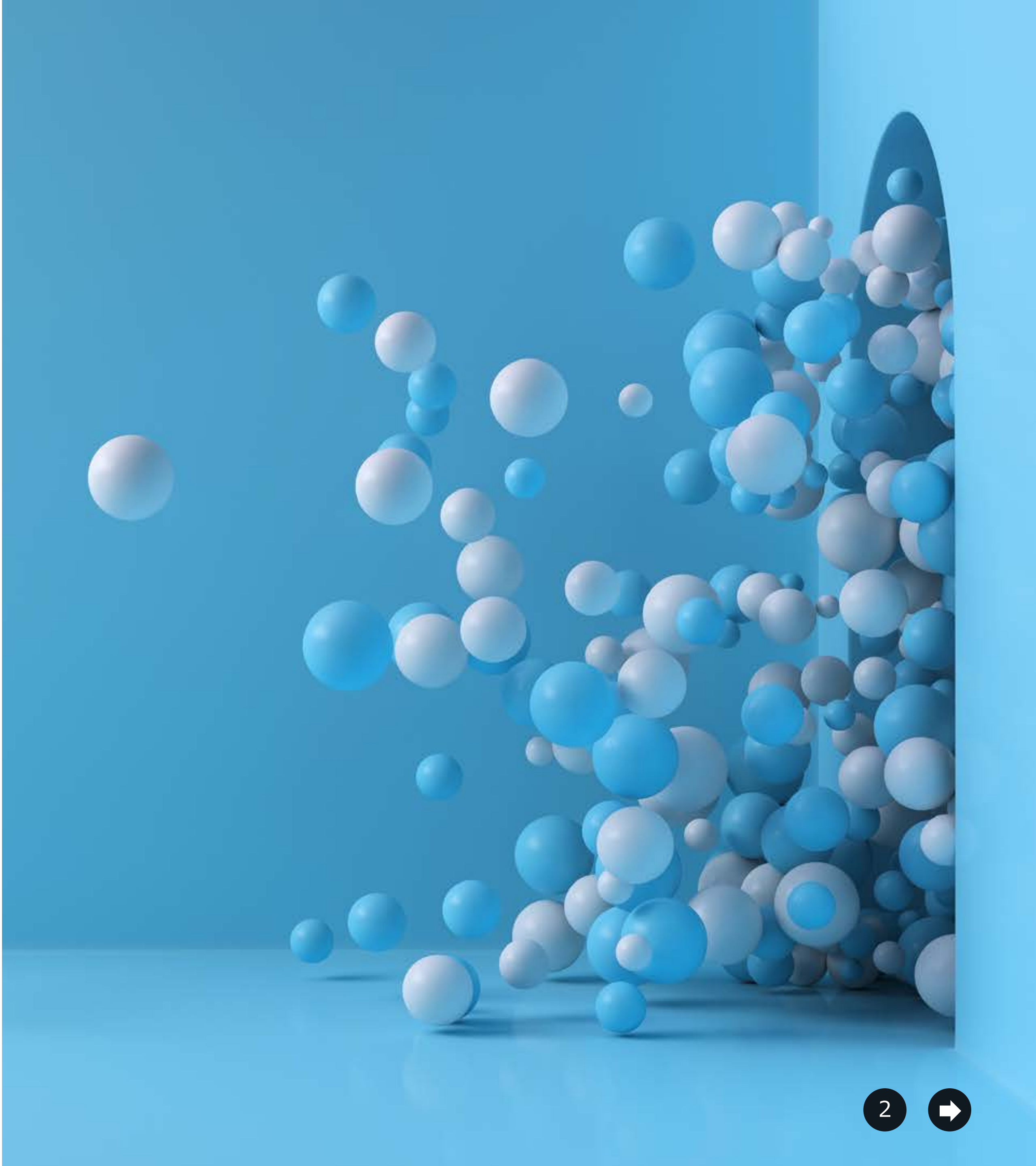
進化したクラウドですべてをレベルアップ

 **NetApp**



# 目次

クラウドの現状	3	➔
体験の強化を目指して	5	➔
進化したクラウドの時代へ	5	➔
新たな一歩	7	➔
1 : データ管理とサイバー レジリエンスを確立する	8	➔
2 : イノベーションとスピードアップの下地を整える	10	➔
3 : シンプルな運用を維持する	12	➔
4 : 環境に配慮する	13	➔
5 : ロックインの原因となるツールを捨てる	14	➔
進化したクラウドのパートナーとしてネットアップが最適な理由	15	➔



# クラウドの現状

クラウドは今後どこに向かうのでしょうか。それを理解するためには、クラウドのこれまでの道のりを、光と影の両面から押さえておく必要があります。

## クラウドが導いた破壊的变化

2006年にパブリック クラウドが登場したことは、まさに破壊的变化と呼べる出来事でした。それまでのモノリシックなITに一石を投じ、従来型のスタックと決別したクラウドは、速度、スケーラビリティ、即応性、柔軟性の面で期待を持たせるものでした。ただし、当初のクラウドには、否定的な声や試行錯誤も入り交じっていました。企業のIT部門の中には、パブリック クラウドを自由に使わせないようにして統制を図り、ブームが去るのを待とうとしたところも多くあります。しかし、クラウドは単なるブームでは終わりませんでした。パブリック クラウドはその後成長を続け、社内の単一のサイロから垂直統合型のスタックへと発展していきました。クラウドの進化は現在も続いています。クラウド事業者はイノベーションを加速させ、新たなパブリック クラウド サービスを次々と生み出しています。企業各社はIT戦略にクラウドをますます密接に取り入れています。業界内では、クラウドへ移行する道筋や、デジタル変革でクラウドが果たす役割について、活発な議論が長年行われてきました。

## エッジに接近

今やデジタル変革は、単なるバズワードではなく、必然的な流れとなりました。企業は常にイノベーションを求められています。変化の速さについていくのは簡単ではありません。クラウドはデジタル変革を前進させる大きな可能性をもたらしました。しかし、破壊的变化を経験した後の世界で成長を目指す企業の前には、次のような壁が立ちはだかっています。



**クラウドの無秩序な肥大化が加速**：クラウド上のアプリケーションの管理が非常に複雑になっています。



**データやアプリケーションのサイロ化**：アプリケーションのモビリティや計測、クラウドの相互運用性に関する目の前の課題を解消する中で、サイロが生み出されています。



**セキュリティ リスク**：コスト管理の問題とともに、セキュリティ リスクが急速に増加しています。一方で、資産の可視化、ガバナンス、統制、コンプライアンスに関して、新たな課題が生じています。

こうした課題はハイブリッド クラウド環境でも見られますが、マルチクラウドの場合は対応がきわめて難しくなります。

## 成り行き任せのクラウド

現在はクラウドの黎明期が終わろうとしている段階です。2022年時点でクラウド サービスを利用している大企業は94%に上ります<sup>1</sup>。これまでどのようにしてクラウドに移行してきた企業も、その過程でさまざまな構成を採用した結果、オンプレミスといくつかのクラウド アーキテクチャが複雑な環境を形成しているケースが多いはずです。これはハイブリッド マルチクラウド環境と言えます。しかし、きちんと目的を定めて戦略を立てたハイブリッド マルチクラウドと、成り行き任せで出来上がったものとは違います。戦略を確立してからクラウドの導入を進めた企業は問題ないですが、成り行きに任せたその他大勢の企業は残念な結果になります。社内のどこかの部門が、目の前のニーズを満たす目的でクラウド サービスのアカウントを新規登録している場合があり、IT部門がその事実を一切知らないケースも多々あります。こうして出来上がった混成環境の場合、ハイブリッド マルチクラウド体験は一貫性がなく混沌としています。これに対処する責任はITOpsチームやCloudOpsチームが負うことになります。



# 94%

2022年時点でクラウド サービス  
を利用している大企業の割合<sup>1</sup>



## クラウドの一時代が終焉

ポイントとなるのは、こうして形成された環境の極端な複雑さをいかに抑えるかです。これを解決できれば、展望が一気に広がります。クラウドはサービスごとにそれぞれ独自のルール、ツール、プロセスがあります。どれか1種類のクラウドでも、専門のスキルを持つ人は常に不足しています。ましてや複数のクラウドに対応できる人は稀です。新型コロナで繰り返し示されたように、破壊的変化は今後も続きます。人材はますます不足し、テクノロジーを生かした変革へのプレッシャーはますます高まっています。運用面の課題を克服しながら、IT主体の変革へのプレッシャーに適切に対応し、安心して取り組みを進めていくには、どうすればよいでしょうか。

クラウドの導入が本格的に広がる中で、話題はクラウドへの移行から日々の運用の効果的な管理に移ってきました。具体的には、サイロをなくし、複雑さを解消して、複数のクラウドとオンプレミス環境にわたるアプリケーションやデータ、リソースのシームレスな管理を安全かつ効率的に実現するには、どうすればよいかということです。

効果的な管理への解を見つけ出すことが、進化したクラウドにつながる重要なポイントです。



# 体験の強化を目指して

現状のままでは、今後どこかで無理が生じるのは明らかです。クラウドは新たな進化のときを迎えました。ビジネスを実質的に支えるプラットフォームとして、クラウドが持つ力をあらゆる企業が完全に生かせるようにしなくてはなりません。アーリー アダプターやスタートアップにとどまらず、大企業も含めて、あらゆる業界のあらゆる企業をクラウドが支えていく必要があります。

我々が目指しているのは、クラウドの複雑さに妨げられることなく、クラウドのメリットをフルに引き出すことができる世界です。そこでは、コストは自動で最適化され、脅威は自動で緩和されます。サイロは解消され、相互運用性は最初から確保されます。ITチームに大勢のスペシャリストをそろえる必要はありません。データやアプリケーションの場所にも制約はありません。オンプレミス、1種類のクラウド、複数のクラウド、ハイブリッド環境のすべてに対応し、自由に移動できます。サステナビリティの目標もついに達成できます。

これが進化したクラウドの姿です。

# 進化したクラウドの時代へ

進化したクラウドとは、ハイブリッド マルチクラウド環境に対する戦略的なアプローチです。企業のアーキテクチャや業務とクラウドが完全に統合されたハイブリッド マルチクラウド環境を実現します。サイロを解消して、オンプレミスと複数のクラウド環境に対するシンプルな管理、一貫性、完全なオペラビリティを確保します。

進化したクラウドの柱の1つが抽象化です。抽象化を採り入れることで、種類が異なる環境の統合と管理や、すべての環境に対する共通のポリシーとプロセスの適用、それぞれの間でのアプリケーションやデータの移動など、さまざまな対応が容易になります。強力な自動化と組み合わせると、運用を統合させるアプローチが可能となります。現在の運用モデルに比べて大幅な強化を実現し、ITチームの負担が軽減します。複数のクラウドを成り行き任せで利用する状況から脱却し、目的を持って戦略的に活用して、効率性とセキュリティの確保や継続的な最適化を実現できます。

進化したクラウドでは、IT部門は次のような成果が得られます。

- パブリック クラウド、プライベート クラウド、データセンター間で**スムーズに相互運用**
- 複数の環境の**管理と運用を一元化**
- **アプリケーションとデータの整合性を確保**し、特定のクラウド アプリケーション フレームワークへのロックインなしでイノベーションを実現
- シンプルな料金と説明を生かして、効率とコストを**継続的に最適化**
- データ資産全体を**可視化**し、一貫した保護とセキュリティを適用
- **共通のデータ管理機能**をストレージ インフラ レイヤで実装し、ステートフル アプリケーション向けのオープンソース データベースにも対応
- ステートレスとステートフルの両方のアプリケーションに向けた**最適化と自動化**に対応し、Kubernetesの主要ディストリビューションを網羅

どれを取っても、ぜひとも必要と思える特徴ばかりです。しかし、ここ数年の経験からもわかるように、変化は簡単なことではありません。応

急処置としてクラウドを場当たりに導入するのではなく、目的を踏まえてハイブリッド マルチクラウドをきちんと設計する必要があります。つまり、今こそ進化したクラウドに移行しなければなりません。

### 進化したクラウドに必須の要素

進化したクラウドには次のような要素が欠かせません。

- **管理プレーンの統合**：抽象化を通じて、一貫性のある運用、一元的な管理、種類が異なる一連のクラウド環境とオンプレミス環境の完全な可視化に対応します。
- **共通のAPI**、サービス、ポリシー、オープンアーキテクチャ：一貫性と柔軟性を確保することで、ワークロード、データ、リソースをニーズに合わせて移動、管理、統合でき、運用を簡易化できます。
- **AIを活用した強力な自動化**：監視、運用、最適化にインテリジェントなオートメーションを採り入れることで、効率化とコスト削減を強化できるほか、サステナビリティの基準から外れるのを防ぐことができます。
- データとリソースの**容易な統合**、管理、移動：ロックインを排除し、完全な柔軟性を確保できます。



# 新たな一歩

ハイブリッド マルチクラウドの管理がうまく回っていない場合、コスト、複雑さ、リスクが跳ね上がり、ビジネスの足を引っ張ることになります。この点に関して手痛い経験をした方も多いことでしょう。まずはハイブリッド マルチクラウドの日々の運用を適正化することが先決です。そうすれば、競合他社の先を行くイノベーションにあらためて着手できます。しかし、ハイブリッド マルチクラウドの柔軟性と即応性を実現しつつ、これまで以上の複雑化を避けるには、どうすればよいのでしょうか。**ビジネスの真の支えになるクラウドは、どのように実現できるのでしょうか。**

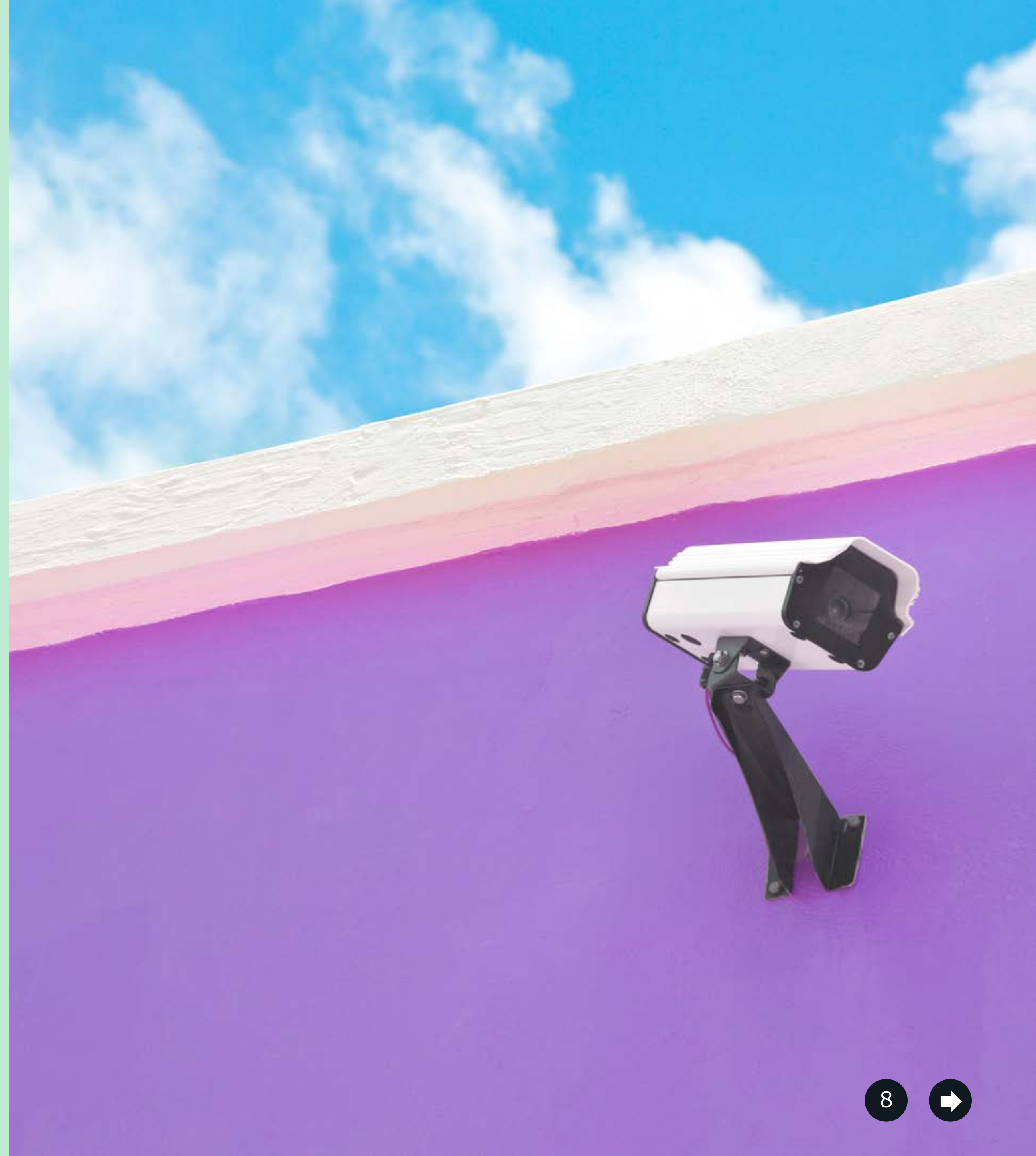
ここでは、出発点となる5つのステップを紹介します。どの順番で取り組んでも構いませんが、進化したクラウドの状態に到達して成果を上げるためには、この5つがすべて必要です。

- 1 データ管理とサイバー レジリエンスを確立する
- 2 イノベーションとスピードアップの下地を整える
- 3 シンプルな運用を維持する
- 4 環境に配慮する
- 5 ロックインの原因となるツールを捨てる

それぞれ見ていきましょう。

# 1 データ管理とサイバー レジリエンスを 確立する

進化したクラウドの状態で行うためには、アプリケーションやワークロードが使用するデータを複数のクラウドから取得できなければなりません。クラウドとオンプレミス間でスムーズにデータを移動し、正しい場所に適切なコストで保存できるようにする必要があります。進化したクラウドの戦略において、ストレージは重要な構成要素の1つです。進化したクラウドでは、データの移動、データセットとワークロードの共存、ファイル ストレージがより良いものになり、利便性が高まります。オンプレミスと各クラウドで共通のストレージ基盤を利用できるからです。





しかし、データの移動や使用が場所にとらわれず自由に行えるからといって、リスクがこれまで以上に高まるようでは困ります。企業のハイブリッド マルチクラウド環境を構成するすべてのノードは、時として鍵をかけ忘れることのあるドアや窓のようなものです。ランサムウェアのような外部からの脅威も確かにありますが、境界の中に敵が存在することも少なくありません。不正なリンクをクリックしたり、悪質な添付ファイルを開いたりする従業員が1人いるだけでも、環境全体が陥落します。Colonial Pipelineがランサムウェアの攻撃を受けたのは、パスワードを1つ盗まれたことが原因でした<sup>2</sup>。

**すべての環境を完全に可視化する**だけでなく、サイバーセキュリティの脅威を入念に防御しなくてはなりません。また、データセンターとクラウドを対象としたデータ セキュリティ、保護、コンプライアンス、ランサムウェア対策、ディザスタ リカバリのポリシーやプロセスに一貫性がなければ、当然ながら複雑さは脆弱性につながります。

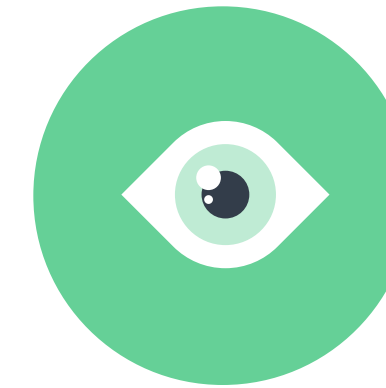
従来のモデルは「信頼を前提として検証する」形でした。これからの新しいモデルは「検証し、信頼しない」というアプローチを取ります。進化したクラウドでは、データ保護、セキュリティ、コンプライアンス、ガバナンスの連係のもとで、総合的なサイバー レジリエンスを確立します。これには次のような特徴があります。



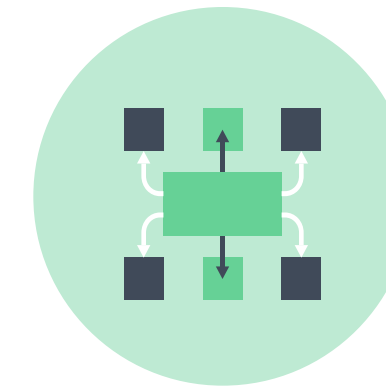
**ゼロトラスト モデル**：従来の境界防御の先を行く、多層的なデータ主体のアプローチです。これにはMicro Core and Perimeter (MCAP) を使用します。MCAPとは、包括的な管理機能セットで保護すべきデータ、サービス、アプリケーション、資産を内部で定義したものです。価値あるデータの損害や喪失のリスクを軽減する管理機能の例としては、多要素認証、ロールベースのアクセス、包括的なロギング、副次的な攻撃を防ぐ監査などがあります。



**常時稼働の保護**：数秒でのバックアップと数分でのリストアに対応し、データ損失ゼロを実現します。



**自動化された高度な脅威検出**：種類が異なる複数の環境の把握と監視や、リスクの軽減に対応でき、データとインフラの死角を減らすことができます。



**データ ガバナンス**：データの分類と区分を実現し、組織内の各所に保存されているデータに対する不正アクセス、開示、改変を防ぎます。

後付けの保護で満足してはいけません。ハイブリッド マルチクラウドの組み込みの保護には重要な意味があります。

<sup>2</sup>ZDNet, [Colonial Pipeline ransomware attack : Everything you need to know]

## 2 イノベーションとスピードアップの下地を整える

「イノベーション」は使い古された言葉ですが、市場での差別化のためにイノベーションが重要な役割を果たすことは間違いありません。目まぐるしい変化が続く中、**企業各社は大規模な変革やイノベーションのスピードを上げ続け、何度も繰り返し取り組んでいく**必要があります。しかし、ハイブリッド マルチクラウド環境の複雑さやリソースの制約やサイロが原因で進展が滞ることもあり得ます。多種多様なアプリケーションを稼働している場合には特にそうです。

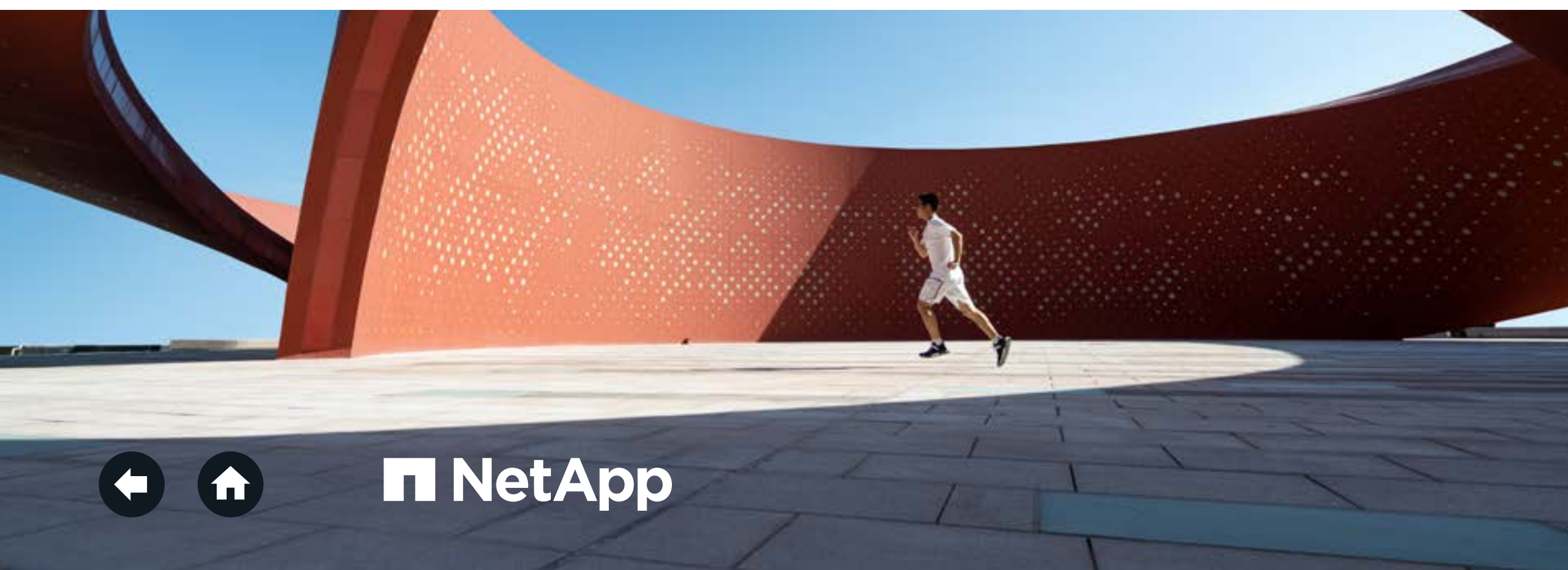
一般に企業で稼働するアプリケーションには、モノリシックなレガシー アプリケーション、オープンソース アプリケーション、Kubernetesベースのモダンなクラウドネイティブ アプリケーション、データベースとその関連アプリケーションなどがあります。また企業のイノベーション戦略には、アプリケーションの最新化やクラウド統合に関してさまざまな目標があります。企業環境の「6R」としては、既存アプリケーションのリフト&シフトを行う「Rehost（ホスティング変更）」、オペレーティング システムやデータベースなどの基盤を刷新する「Replatform（プラットフォーム変更）」、クラウドネイティブなアーキテクチャ向けにアプリケーションのコードを修正する「Refactor（リファクタリング）」、SaaSのサービスを導入する「Repurchase（再購入）」、アプリケーションを完全に退役させる「Retire（撤去）」、動いているアプリケーションには指一本触れず、目も向けないようにする「Retain（維持）」があります。

技術面や予算面に関する自社の戦略的な動機に合わせて、6Rの各要素をそれぞれのアプリケーションに導入できます。**進化したクラウドなら、この6項目を実践しやすくなります。**共通のインターフェイスでのガバナンス、エンタープライズ データ保護、コンプライアンスに対応した統合データ管理により、イノベーションとスピードアップに向けてハイブリッド マルチクラウドの下地を整えることができます。

同時に、エンタープライズ アプリケーションや、ストレージを大量に消費するVMワークロードなど、従来型のアプリケーションやそのデータをクラウド インフラに配置するケースも増えています。こうしたアプリケーションやデータの重要性を考えると、優れた性能、信頼性、可用性は欠かせません。しかし実際には、この種のアプリケーションをクラウドで稼働すると、コストの上昇、可用性の低下、複雑化につながるが多々あります。進化したクラウドなら、こうしたアプリケーションを対費用効果に優れた方法でクラウドにすばやく移行できます。移行先のクラウドは自由に選択でき、効果的に管理できます。アプリケーションやワークロードの場所を自分の判断で決められます。

進化したクラウドなら、アプリケーションからデータベースへのアクセスも柔軟です。クラウド上のオープンソースのデータベースにアクセスする場合も、オンプレミスのデータ ストアを利用する場合も、データ レイヤや関連インフラの導入、管理、監視を一元的に扱うことができます。たとえば、オープンソースのアプリケーションの場合、レガシー データベースの使用がボトルネックになることがあります。進化したクラウドならこうした問題を解消でき、アプリケーションに合ったデータベース テクノロジーを利用できます。

さらに、進化したクラウドでは、開発プラットフォームも開発者が自由に選択できます。成果物であるアプリケーションやワークロードの導入も複雑さを抑えることができ、どこにでも導入できます。こうした柔軟性を支えるうえで必要となるのが、移行や管理が簡単で拡張性に優れた永続的なデータ ストアであり、アプリケーションの移行を実現し、開発とテスト、データ移行、アプリケーション更新に対応する必要があります。

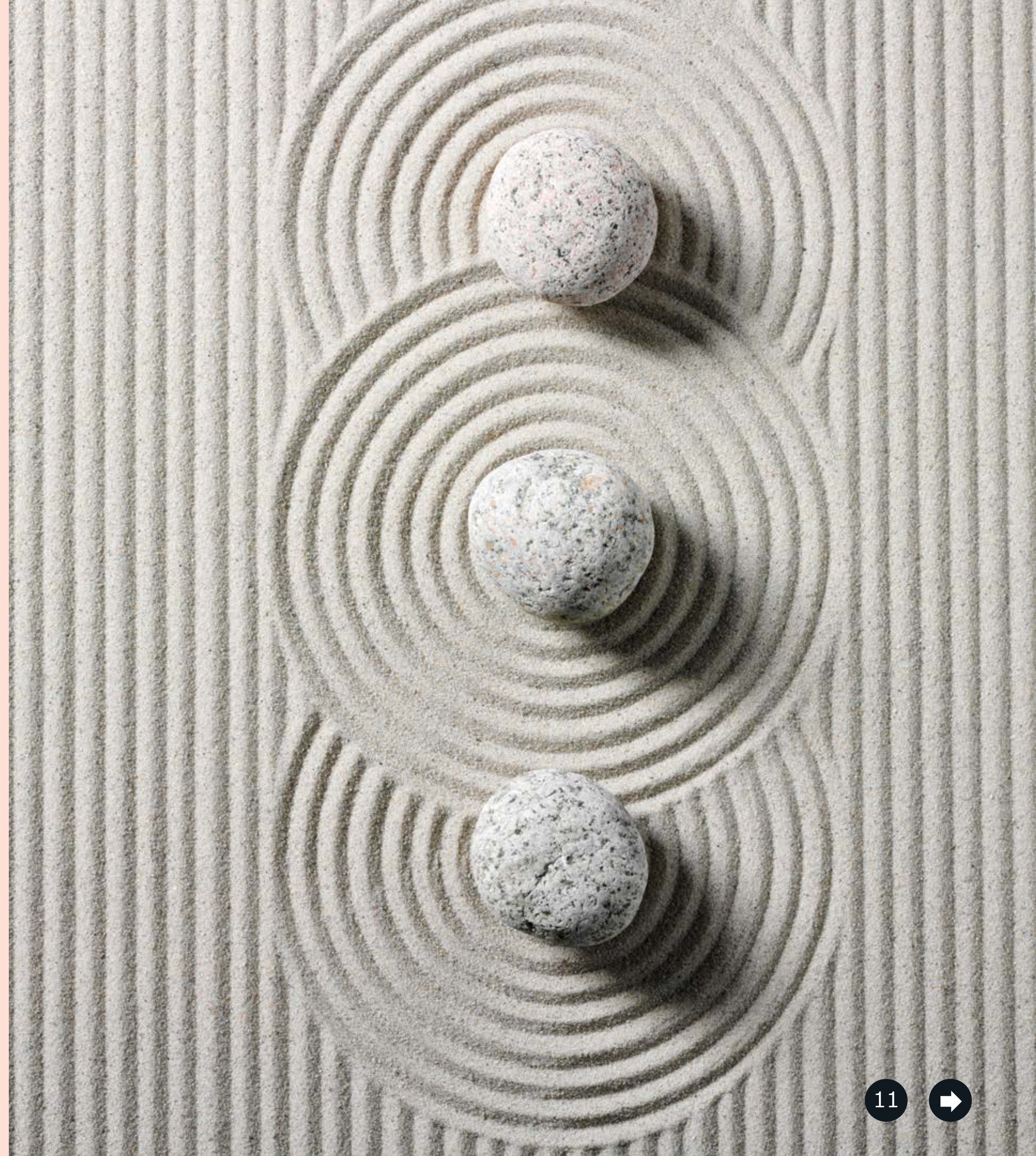


## 簡易化、標準化、統合

進化したクラウドなら、コンテナやマイクロサービスの管理の簡易化や標準化も実現できます。Kubernetesを採り入れてクラウドネイティブ アプリケーションを実現している企業は数多くあります。可搬性を備えたアプリケーションの開発や迅速なリリースという面で、KubernetesはDevOpsの大きな力になります。エッジやデータセンターからクラウドまで、あらゆるインフラでアプリケーションを稼働できます。しかし、Kubernetesベースのクラウドネイティブ アプリケーションの稼働では、インフラに新たな課題が加わるほか、バックアップ、クローニング、ディザスタリカバリ、データのライフサイクル処理、データ最適化、コンプライアンス、セキュリティなど、広範囲にわたるデータ管理機能が必要となります。

## 進化したクラウドでは、すべてのアプリケーションを集約した統合管理が重要な意味を持ちます。

Kubernetesクラスタ向けの永続的データの管理の簡易化や、オープンソース アプリケーションやクラウドネイティブ アプリケーションの迅速な導入、ストレージを大量に消費するVMワークロードやエンタープライズ アプリケーションで求められるベアメタルのパフォーマンス、高可用性、1ミリ秒未満のレイテンシ実現などが必要になります。進化したクラウドを利用することで、アプリケーションのニーズに合った規模で信頼性と効率性を確保できます。まさに理想的な環境です。



## 3 シンプルな運用を維持する

多くの企業が対応を迫られているのが**クラウド人材の不足**です。種類が異なるさまざまなクラウドサービスやプロトコル、プロセスを扱ううえでは、膨大な作業が必要となり、手作業も少なくありません。ハイブリッド マルチクラウド環境を適切に稼働させるために必要な専門的人材が不足しています。近年特に大きな変化をもたらした技術革新を考えてみると、いずれも人という側面が関係しています。複数のクラウドを戦略的に利用することも同じです。

サービス化がもたらすイノベーションの多くは、人々にとって価値が高い要素をシンプルに効率よく利用できるようにすることに主眼を置いています。こうしたサービスは標準化されていて、世界のどこにいても同じように利用でき、SaaSベースの共通のインターフェイスで管理できます。必要なタイミングで数クリックの操作を行えば、どこからでもサービスをオンデマンドで利用でき、料金は使用量に応じて決まります。進化したクラウドに移行すれば、すべてがスムーズです。

### 運用の統合

進化したクラウドでは、ハイブリッド マルチクラウド環境全体を通じて、ストレージやデータ、アプリケーション サービスを抽象化し、一貫性を確保しています。**したがって、あらゆる部分の運用を統合し、合理化できます。**作業にあたる適切な人材を十分に確保できないまま混乱に対処しているITチームにとっては大きな負担軽減です。

環境の複雑さや、オブザーバビリティの不足、セキュリティの脆弱性などの難点を解消し、クラウドとオンプレミスで一貫した体験を確保することで、サイロ化を解消できます。つまり、イノベーションを妨げる障壁をなくし、余分なコストの発生を抑え、不必要なデータ開示がセキュリティ上の脅威になるのを防ぐことができます。

進化したクラウドでは、CloudOps、FinOps、SecOpsなど、あらゆるOpsを統合できます。SaaSベースのグローバルなコントロールプレーンを使って、複数の種類の要素からなるハイブリッド マルチクラウド環境を一元的に管理できます。可視性と制御が向上し、データやリソースを自動化できる余地が広がります。数クリックの操作でサービスをオンデマンドで有効化し、データ保護、ガバナンスとコンプライアンス、拡張性、コ

スト最適化、可搬性などを環境全体で一貫してサポートできます。ニーズの変化に合わせてリソースの動的な変更や再割り当てに柔軟に対応でき、個別の環境やクラウドごとに専門の人材を確保する必要性を抑えることができます。

### インテリジェントな自動化

運用を統合することは大きな前進です。しかし、進化したクラウドの重要な要素の1つとして、AIベースの自動化も採り入れる必要があります。そうすれば、ITチームの手作業の負担が減り、付加価値の高い取り組みに力を注ぐことができます。セキュリティの脅威を執拗に監視したり、月末の多額の請求を避けるためにクラウドのコストを手動で最適化したりする必要はありません。

## 4 環境に配慮する

調査結果によると、CEOの半数はサステナビリティを最優先事項と考えており、サステナビリティが今後5年間で業績の向上につながると考えているCEOは80%に及びます<sup>3</sup>。環境に配慮することはビジネスとして十分合理的です。進化したクラウドでは、環境問題への対応は後付けの副次的要素ではありません。具体的なアクションを通じて、ITのサステナビリティの目標にきちんと取り組むことができます。

### パブリック クラウドへの移行を引き続き推進

オンプレミスのデータセンターからパブリック クラウドに移行することは、環境フットプリントの大幅な削減につながります。ハイパースケールの巨大なキャンパスは効率性が非常に高く、オンプレミスのデータセンターに比べて二酸化炭素排出量を大幅に削減できます。大手クラウド プロバイダはサステナビリティの基準達成やそれ以上の成果に向けて、多額の投資を行ってきました。Amazon Web ServicesやAzureは、どちらも2025年までに100%再生可能エネルギー化を達成すると宣言しています。Google Cloudはすでにカーボン ニュートラルを達成し、2030年には100%カーボンフリー エネルギーで事業を運営すると宣言しています<sup>4</sup>。

現実問題として、データセンターは大量のエネルギーとリソースを消費します。データセンターのエネルギー消費や二酸化炭素排出の問題に対処するために、すでに取り組みを始めている企業も多いはず。コンテインメントや液冷を利用してエネルギー消費を節約したり、グリーン コンピューティングの手法で二酸化炭素排出量を減らしたりする取り組みです。**データ保存を最適化することはこの面でも効果があります。**データセンターのエネルギー消費の10~15%はデータの保存に費やされているからです<sup>5</sup>。世界中で生成されるデータがますます増える中、複雑なハイブリッド マルチクラウ



ドでは、エネルギー消費はいっそう増加し、二酸化炭素排出量も増えていきます。

データの無秩序な増加を抑えることは、進化したクラウドでは大きな意味を持ちます。ネットゼロやサステナビリティの目標達成を目指す企業は、見かけ倒しの環境配慮ではなく、大手パブリック クラウド プロバイダの優れた効率性を生かすことや、データの最適化や保存を強化することが欠かせません。相互運用性や複雑化の懸念からワークロードの移行に二の足を踏んでいた場合でも、進化したクラウドなら障壁を抑えられます。

### 自動化で環境保護を強化

自動化はサステナビリティをさらに後押しします。アプリケーションのニーズに応じたインフラの最適化を自動で継続的に行うことで、コストだけでなく二酸化炭素排出量も削減できます。利用率とエネルギー消費量を完全に可視化して、排出量に基づく意思決定に反映することで、サステナビリティの目標に応じた適切な判断が可能になります。

<sup>3</sup>IBM Institute of Value, 「Sustainability Ranks Among Highest Priorities on CEO Agendas, Yet Lack of Data Insights Hinders Progress」

<sup>4</sup>Spiceworks, 「Now and forever, the sustainability battle between the big three of cloud」

<sup>5</sup>Energy Innovation, 「How much energy do data centers really use?」

## 5 ロックインの原因となる ツールを捨てる

進化したクラウドでは、各クラウドやオンプレミスの標準装備のツールにとどまらず、さらに上に行くツールを活用する必要があります。いわば金銭管理のようなものです。子供の頃は単純な小遣い帳でも用が足りますが、大人になって収支が複雑になってきたら、もっと高度な家計簿やツールが必要になります。ハイブリッド マルチクラウドに携わる担当者にとってこの点は特に重要です。特定のクラウドへのロックインを余儀なくされるソリューションや環境の利用は避けなくてはなりません。**進化したクラウドならその実現は可能です。**しかしすべてのベンダーが実現できるわけではありません。

そこで力になるのがネットアップです。

# 進化したクラウドのパートナーとして ネットアップが最適な理由

ここまで5つのステップを説明してきましたが、あと1つ加えるとしたら、クラウドのポテンシャルを完全に引き出せるパートナーを選ぶことが重要です。ネットアップは、企業が破壊的な変革を難なく乗り越え、それを強力なイノベーションに変えるお手伝いをします。私たち自身、同じことを30年以上にわたり行ってきました。そして今、ネットアップはクラウドの次の進化を主導し、より優れたハイブリッド マルチクラウド エクスペリエンスを創造しています。クラウドは万人のものでなければならないからです。

**ストレージ、データ、アプリケーション サービスで構成されたネットアップのポートフォリオは、進化したクラウドに適した製品で、ハイブリッド マルチクラウドの統合されたエクスペリエンスを実現できます。**どのような環境に対しても、組み込みのデータ保護が効果を発揮します。他社と違って、閉ざされたインフラやプラットフォームにお客様をロックインすることはありませんし、利用可能なクラウドについて事細かに制約を設けることもありません。

ネットアップは、クラウド ストレージの長年の実績を生かして、複数の環境をカバーする可視化、アプリケーションを主体とする自動化、継続的な最適化を実現します。さらに、業界をリードするCloudOpsテクノロジーの買収や統合を通じて、機能を強化しています。ストレージ、データ管理、セキュリティの基盤を共通化しており、ハイブリッド マルチクラウド環境の管理はシンプルです。ネットアップのテクノロジーを生かして複雑さを解消し、コスト、リスク、効率性、サステナビリティという面ですべてを常に最適化しています。

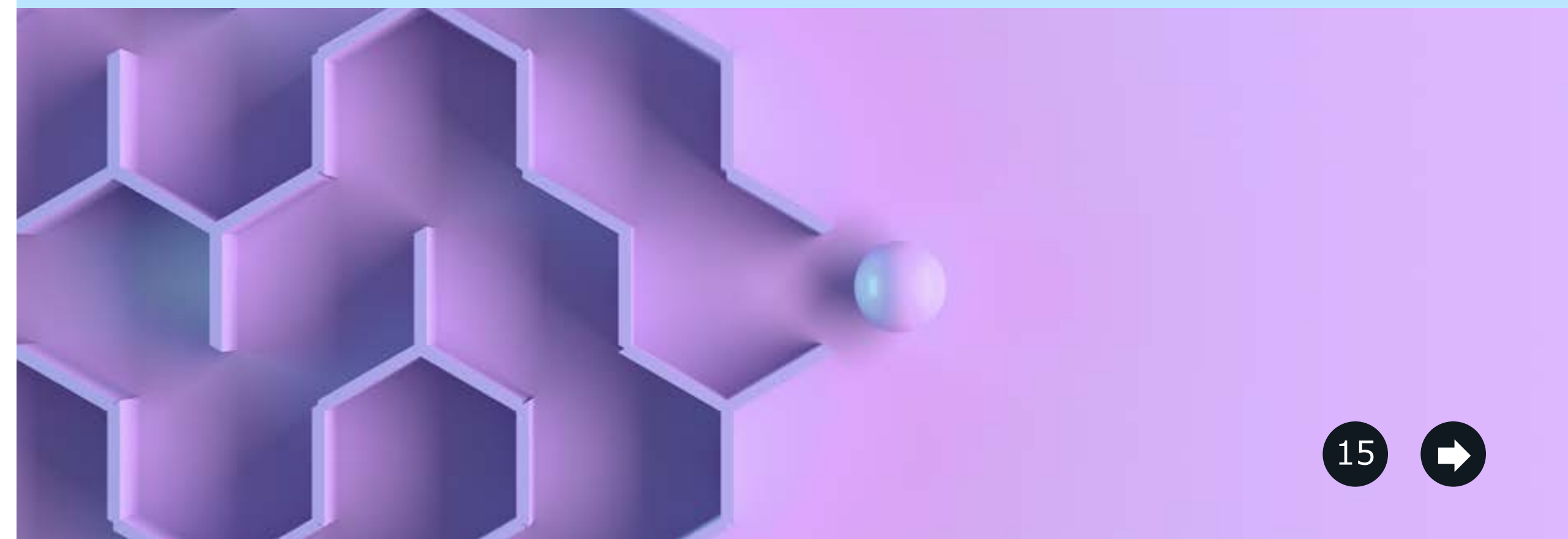
**NetApp Blue XP™**では、単一のコントロールプレーンと一連のAPIを通じて、ハイブリッド マルチクラウドの運用を統合できます。SaaSベースのストレージとデータサービスを生かして、監視や保護の連携、強力な自動化、柔軟な消費オプションに対応できます。

運用を統合する



**Spot by NetApp**は、インフラの自動化でCloudOpsに簡単に対応でき、パフォーマンスの向上と継続的なコスト削減を実現します。オープンソースのクラウドネイティブ データベース技術を簡単に取り入れ、旧式のプラットフォームからスピーディに移行できます。

詳細を見る



# クラウドをビジネスの真の支えに

クラウドへの移行にすでに乗り出している企業も多いことでしょう。  
しかし、進化したクラウドのエクスペリエンスはこれからが本番です。

進化したクラウドへの一歩を踏み出す



進化したクラウドにとってネットアップが  
最適な理由を見る



<https://www.netapp.com/ja/forms/sales-contact/>

© 2022 NetApp, Inc. All rights reserved. NetApp, NetAppのロゴ、<https://www.netapp.com/company/legal/trademarks/>に記載されているマークは、NetApp, Inc.の商標です。その他の会社名と製品名は、それを所有する各社の商標である場合があります。NA-0920-1022-jaJP